

## 第3章



# 身振りとことば

視覚や触覚のような非言語的認知によって得られた情報を言語に変換する過程とは、いかなるものなのだろうか。その過程では、非言語的情報に当てはまることばを探すということと同時に、非言語的情報を言語で表しやすいように組み替えていくということが起きている。この組み替えに「身振り」(gesture) による「からだ的思考」(spatio-kinesic thinking) が関わっていることが最近の研究によって分かってきた。

本章では、このような非言語情報と言語の間をとりもつ身振りがどのように発達するのかを、ことばの発達に関連づけて考察する。まだことばが十分発達していない子どもの身振りは、社会的に共有された記号としてコミュニケーションを支える。さらに身振りは、一語発話期から二語発話期への過程においても重要な役割を果たす。ひとたび単語と単語の組み合わせを学び、ことばが社会的に共有された記号によるコミュニケーションをになうようになると、身振りの社会的役割は低減され、それは、からだ的思考の場として機能しはじめる。

## 1 非言語的認知と言語

ことばの発達の過程で、子どもたちはいったい何を獲得していくのだろうか。まず、言語の基本要素は何かということと、基本要素同士が組み合わさりどのような構造を作り上げるのかという、記号の体系としての言語を獲得していかなければならないことは明らかである。

日本語の文の組み立てを例に考えてみよう。日本語には、

「私」、「が」、「リンゴ」、「を」、「食べる」という単語があるという知識、「私がリンゴを食べる」という単語の組み合わせが日本語の文として適切であるという知識、そして「私は」と「リンゴを」をまとまりとして「リンゴを私が食べる」というように順番を変えても文として成り立つという文の階層構造の知識、などを獲得することが必要である。また、「が私をリンゴ食べる」のような組み合わせでは日本語の文として成り立たないという、語順の規則の知識も獲得する必要がある。それに加えて、各々の単語の意味と、それが組み合わさって文になったときの意味を知る必要もある。

言語獲得の分野では、このような要素の組み合わせ規則と意味解釈の体系の問題を中心にさまざまな研究が行われてきた。その背景には、「複雑かつ各言語ごとに恣意的に異なるように見える言語の知識を、子どもはいかにして獲得することができるのか」という言語学者の問題提起に刺激されて、現代の言語獲得研究が盛んになったという事情がある（そのような問題提起の典型的なものはチョムスキー（Chomsky, 1965）に見られる）。このような研究の枠組みでは、言語の恣意性というものが重要視される。「リンゴを」が正しくて、「をリンゴ」が間違っているということを経験から推測することはできない。それは、単に日本語話者の間のとりきめにすぎない。したがって、言語の知識はそれが生得的なものであれ、発達の段階で獲得されたものであれ、私たちが外界と関わっていくときに使われる知識とは別の独自の体系を持つ自律的なものであるとされてきた。この自律性ゆえ、言語の発達は認知一般の発達に還元することはできないと結論づけられる、と同時に言語の発達は視覚、聴覚、触覚などの非言語的認知とは独立に研究しうるものであるという考えにつながっていった。この考えは、単語の意味の獲得という分

野を除いては広く受け入れられている。

しかし、言語を違った角度から見ると、非言語的認知と緊密な関連の中に存在することばが見えてくる。私たちは、見たこと、聞いたこと、触ったもの、味わったもの、嗅いだもの、考えたこと、感じたことをことばにすることができる。というよりも、私たちは日常そのようなことを伝え合う目的で言語を使うことがほとんどである。私たちは常に、非言語的認知によって得られた情報をことばにするという作業を行っているわけである。この過程においては、社会的に共有された静的な規則の体系としての言語が、私的な非言語的認知と正面からぶつかり合うことになる。

言語が非言語的認知と相対するとき何が起こるか、さらに考察しよう。言語は、確かに非常に豊かな無限の可能性を秘めた表現体系ではあるが、その限界も明らかである。たとえば、牛肉と豚肉の味の違いは一言で言い表せない。このような場合、全体をより小さい部分に分解したり、物事を違う角度から捉え直すことによって、ことばとして表現しやすくすることになる。言語にはおかまいなしに起こる非言語的認知と、言語という社会的に規定された枠組みの間に、何らかの妥協点を見つけるという作業を、私たちは話す過程で行っている。何が表現しやすいかというのはおのおのの言語によって違うので、この認知と言語の接点を整合性のあるものとしていく仕組みは、発達の過程で徐々に獲得されなければならない。記号の体系として言語を身につけるだけでは、私たちは話すことはできない。ことばの発達には、言語の獲得とともに、言語と非言語的認知の接点の仕組みの発達が不可欠である。

本章ではそのような仕組みの発達という観点からことばの発達について論じていく。

## 2 認知と言語の接点と、表象的身振り

ヒトは、話すとき発声器官だけでなくからだ全体を使っている。視線、顔の表情、聞き手との距離のとり方、身振りなど、さまざまな非言語的行動が話しことばには伴う。このうち、ことばを発しようとしているとき、または発している最中に集中的に起こるからだの動きを「共発話身振り」(co-speech gesture)と呼ぶ。そのうち、親指と人さし指で輪を作るOKサインなど社会的にその形が完全に規定されているものを「エンブレム」(emblem)と呼び、話し手が比較的自由に作り出すからだの動きを「自発的身振り」(spontaneous gesture)と呼ぶ。自発的身振りは大きく分けて2種類ある。一つは、「拍子」(beat)と呼ばれる手をこまかく上下させる身振りで、それはことばの内容に関係なく話しの進行の節目に現れる。もう一つは、「表象的身振り」(representational gesture)と呼ばれるもので、それはさらに、2種類に分けられる。一つは、からだの動きと同時に発せられることばの意味とが、形の上で類似性を持つ「映像的身振り」(iconic gesture)で、もう一つは、そして身体の動きがある方向また場所を指し示す「直示的身振り」(deictic gesture, 主に指さし)である。(OKサインのような身振りを含めた分類については喜多(1993)を、自発的身振りの分類についてはマクニール(1990)を参照。)

以下に、表象的身振りの具体例を挙げておこう。自分の部屋の家具の配置を思い出しながら説明するという場面を想定してみよう。「入ると正面に机があって、その右に本棚があって」というような説明をするときに、「右に」ということばと同時に右前方

に指を向け（直示的身振り）、「本棚」というのと同時に、何段もある棚を上から順になぞるかのように、手が動いてしまう（映画的な身振り）。このような身体の動きが表象的身振りである。

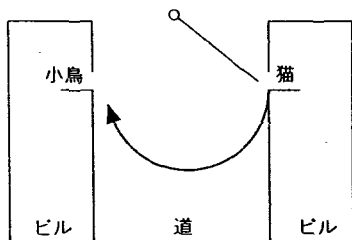
マクニール（1990）によれば、表象的身振りは、話し手の心の中に存在する発話のもとになったイメージが形を求めて現れたものである。発話のいわば「種」はイメージと言語的意味カテゴリーの両面性を持っており、意味カテゴリーは言語による表現へ、イメージは身振りへと「発達」していく。このとき、自発的身振りはその形が社会的に規定されていない、その場その場に応じた個人的な創造であるので、心の中のイメージを比較的歪みなく映し出しているとされている。

マクニールの理論では、発話のもとになるイメージは言語とは独立の表現媒介であり、何語を話しているかには依存しない（マクニールの最近の論文（McNeill, to appear）は、この立場をとっていない）。たとえば、ある映画の同じ場面を見たアメリカ人と日本人は、それについて語るとき言語による表現は違ってくるが、表象的身振りによる表現には違いは出てこないと考えられている。しかし、最近の研究で発話のもとになるイメージの言語特殊性が明らかになってきた。つまり、同じものを見ても、話す言語によって話すときに作られるイメージに違いがあることが分かってきた。さらに、そのイメージの違いは、各言語がどのように情報を分節化するかに対応している。

喜多（Kita, 1993）は、英語話者と日本語話者に同じアニメーションを見せ、どんな話だったかアニメーションを見なかった人に伝えてもらうという課題において、その2つのグループの表象的身振りの違いを明らかにした。問題となるのは、次のシーンである（図1）。

このシーンでは、小鳥を捕まえようとした猫がターザンのよう

■図1 振り子のシーン



にひもにつかまって、ビルからビルへ飛び移ろうとする。この状況を説明するのに、英語では swing という頻度の高い単語を使って、ある目的地へ向かっての場所の移動と弧を描く軌跡という2つの情報を同時に表すことができる。しかし、日本語には swing に相当する自動詞は存在しない。「弧」も頻度の低い専門用語的な単語で、すぐには思いつかない。11人の大人の英語話者と日本語話者が、この場面をどのようにことばと身振りを使って表現したかを調べた結果、次のようなことが分かった。

まず、言語表現において明らかな差があった。11人の英語話者は全員 swing という単語を使ってこの場面を説明したが、日本人は一人として「弧」という単語を使ったものはいなかった。弧を描く軌跡は、「ターザンのように」というような比喩表現によって含意されることはあっても、明示的な言語による表現にはならなかった。日本人は、「飛んでくみたいなこと」、「飛び移ろうとした」、「小鳥の方を目がけていった」、「ビルからビルへ」などの表現で猫の移動について表現した。

この場面を表現する身振りは、下向きの弧を描くものと(図2)、直線(上向きに緩やかな弧を描くものを含む)を描くもの(図3)の2種類に分けることができた。11人の英語話者と日本

■図2 弧の身振り



■図3 まっすぐ身振り



語話者を、この2種類のどちらの身振りを使ったかで分類したのが表1である。

ここには、前記のマクニール理論が予測するような言語の違いを超える共通性ととも、マクニール理論の予想に反する言語間の違いをそのまま反映した身振りの違いも見られる。共通点は英語話者は全員、そして日本語話者の大部分は弧を描く身振りを使ったということである。振り子のシーンにできるだけ忠実なイメージを作るという傾向が、明らかに見られる。しかし、日本語話者には、英語話者のほとんど使わない直線を描く身振りを使う者が多くいた。日本語話者は、軌跡の情報を捨象したイメージをも

■表1 使われた身振りの文化差 (Kita, 1993)

	英語話者	日本語話者
弧のみ	10	4
弧とまっすぐ	1	5
まっすぐのみ	0	2



作り出している。この情報の取捨選択は言語によってより表しやすい方向へと行われている。つまり、表象的身振りは、アニメーションから取り込まれた空間的情報への忠実度と、言語による表現のしやすさの間の「妥協」の産物とも見ることができる。振り子シーンに関する空間的情報の記憶をもとにイメージを生成する心的過程と、それをことばにする心的過程との間に、お互いの調整を取り合い整合性を高める機構が発話の瞬間にはたらいていると考えられる。表象的身振りは、このような認知と言語の接点で生成されている。表象的身振りに現れるイメージは、言語とは無関係に想起されるものではなく、言語という社会的に規定された枠組みの中で、いかに非言語的情報を構造化するかという創造的な思考過程そのものなのである。

この認知と言語の接点での調節機構について、もう少し考えてみよう。なぜ、イメージとからだの動きがこのような機構に関連しているのだろうか。ここで一つ考えられる仮説は、複雑な情報の分節化には、2種類の思考が関与しているという可能性である。一つは、環境を客観的に脱文脈化された（いろいろな文脈で使える一般性の高い）概念の組み合わせによって表す「分析的思考」(analytic thinking)。もう一方は、環境にはたらしかけようとするとき、自然にからだをどう使うのが最適なのが考えなくても分かってしまう（たとえば、ある形状のものをどうつかめば安定するのか）というような「からだ的思考」である。この環境に自然と促されるからだの動きが、逆に環境についての情報を組織化することにもなる。分析的思考での情報の組織化が行き詰まったとき、からだ的思考は、それを打ちやぶる糸口となると考えることはできないだろうか（この2種類の思考の詳細については、喜多 (Kita, to appear) を参照）。

ゴールデン = メドウラ (Goldin-Meadow, *et al.*, 1993) の研究

は、上記の2種類の思考仮説を支持するデータを提供する。9～10歳児に算数の問題（たとえば、 $6 + 7 + 4 = \underline{\quad} + 4$ ）を解かせ、その理由を説明させるという課題で、正しく解けなかった子どもの説明と表象的身振りを分析した。解けなかった子どもは2種類に分けられたと報告している。一つは、身振りがことばでの（間違った）説明と符合する子ども、もう一方は身振りが符合しない子どもである。符合しない身振りはことばの説明とは違う解法の可能性を示し、その中には正解に至る正しい道筋を示すものもあった。たとえば、「6と7と4をたすから17」と言いながら、6と7に指をさすというのはその一つの例である。符合しない身振りをした子どもは、そうでない子どもに比べて、その後の学習期において課題の理解が早かったと報告されている。理解の過渡期にある子どもに見られるこの符合しない身振りは、からの思考を使って、ことばにはまだできないいろいろな解法を探っていたと考えることができる。同様の現象は、5～8歳児にも観察されるとゴールデン=メドウらは報告していることから、からの思考と分析的思考の2段構えは、遅くともその時期には完成していると考えられる。

ここまでをまとめると、ことばの発達には、自律した記号の体系としての言語を獲得するだけでなく、非言語的認知によって得られた情報をことばにするときに必要になる認知と言語の接点の調整機構を獲得することが必要である。8歳までに、表象的身振りというからの思考が、分析的思考では得にくい新たな構造を非言語的認知情報に与えるのを助けるという仕組みができ上がっている。このような、からの思考と発話生成過程の連携がどのように発達していくのか、次節以下で見たい。

### 3 ことばの発達と身振りの発達

3歳の誕生日を迎える前に、子どもの身振りは何度か質的な変化を遂げる。ここでは、その変化をことばの発達における重要な変化と対応づけながら考察する。

#### 1) ことばの誕生と身振り

まず、1歳半以前の子どもの身振りの発達は、ことばの出現にどう関連づけられるだろうか。この時期に見られる身振りは大きく2つに分けられる。一つはからだの一部を伸ばしてある方向を指し示す「直示的身振り」、そしてもう一つは身体の動きそのものが何か別のものを表現する「象徴的身振り」(symbolic gesture)である。象徴的身振りはからだの動きとその指示対象の間に類似性があるという点では映像的身振りに似ている。その一方、かならずしもことばとともに発せられないこと、そして同じ身振りが何度も使われるという点ではエンブレムにも似ている。

このような身体の動きははじめから指示対象や目的が大人に明らかでない。麻生(1992)によれば、子どもがある機能を意図していると、大人がはっきりと解釈できる直示的身振りや象徴的身振りが現れるのに1カ月から2カ月先立って、形式は同じでも機能のはっきりしない「原身振り」(proto-gesture)が現れる。大人がそのようなからだの動きにも意味を付与してある一定の反応をすることが、子どもが形式と機能の安定した対応という記号のなりたちを理解するのを助けているのかもしれない。いずれにせよ、生後10カ月前後から、指示対象のはっきりした意図的な身振りが現れる。その様子を、最も使用頻度の高い身振り

になっていく指さしの発達について、まず論じる。

指さしの出現は、3つの発達の流れが1つにまとまり新たな機能を持った行動を生み出す劇的な瞬間である。まず、その3つの流れを1つずつ見ていこう。まず第一番目の流れは、手の動きと言語的音声の「同期」(synchronization)である。その現れは、腕を縮めたまま人さし指を伸ばす「指たて」と呼ばれる行動である。指たては生後3カ月ごろ始まり、それは子どもが声帯を振動させる言語音の候補となりうるような音を発した前後により多く見られる(正高, 1993)。この段階では、伸ばされた指先は何を指し示しているというわけではないし、言語的音声も特定の意味を表しているというわけではない。指たては生後9カ月から13カ月の間に急激に頻度が減り、それとともに腕を伸ばし視線も伴った指さしが急激に増える(正高, 1993; Lock, *et al.*, 1990)。このことは指たてが指さしの起源になっていることを示唆するが、指さしには他にも起源がありそうである。

指さして合流する第二の流れは、からだの一部をある方向に伸ばすことによって、方向に関する意図を伝えることの発達である。麻生(1992)の日誌的観察記録によれば、「手さし」と呼ばれる手のひらを開いたまま腕を伸ばす行動が、指さしに先行して現れる。生後10カ月ころから、「あっちへ行きたい」「あれが欲しい」と、手さしで大人を操作するようになる。そのあと10カ月半ばころから「指さし」が現れる。しばらくは手さしと指さしは共存する。手さしは主に大人を自分の思うとおりに動かすのに使われ、指さしはものを指し示すのに使われる。

指さしに合流するもう一つの第三の発達の流れは、「人さし指によるものの探索」である。9~13カ月児を調査したベイツら(Bates, *et al.*, 1979)によれば、指さしに先行し、人さし指による探索が見られる。それは、指さしが10カ月ころ現れたあとも

それと共存する。これは、子どもが「からだ的思考」の助けをかりて外界を分節化していく過程と捉えることができる。人さし指による探索の頻度が高い子どもは、言語の能力〔理解できたり、話すことのできる単語数など〕が高い傾向にある。これは、子どもの物質世界の理解が豊かになっていく過程の反映である。

麻生の記録の指さしについて特筆すべきことは、指さしの最も初期の段階から、「わうわ(ん)」(ある種の四つ足動物を意味する)などの名称語的な「原言語発話」(protolanguage utterance)〔音声的にも意味的にも比較的安定した発話〕がともに発せられることである。これは、言い換えるならば、「わうわ(ん)」という一般的意味を持つ記号を使い、ある具体例に対する注意を他者と共有するという、ことばによるコミュニケーションの基本の獲得への大きな一歩を踏み出したといえる。前記のベイツらの研究によれば、指さしの頻度と言語発達との間には強い相関がある。指さしとは、手さしに見られるからだを使った方向についてのコミュニケーションと、指たてに見られる言語音声との同期と人さし指探索に見られる外界の分節化の進展という3つの発達の流れが合流し、ことばによるコミュニケーションの1つの基本型に向けての大きな変化に昇華したものである。

次に、象徴的身振りの出現について見てみよう。象徴的身振りとはからだの動きそのものが、もの、しぐさ、起こって欲しい出来事などを表現するものである。さらに、同じからだの動きは違う場面でもほぼ同じ意味で使われる。両手を広げて飛行機を表現したり、ドアのノブをまわすような手の動きでドアから外に出ることを表現したりするのがその例である。アクレドロとグッドウィン(Acredolo & Goodwyn, 1990)は、このような「身振りの単語」とでもいうべきもの出現について研究した。象徴的身振りは、生後10カ月から20カ月の間に現れ、一人ひとりの子どもの

音声による単語の出現と身振りの単語の出現時期を比べると、両者はほぼ同時期である。象徴的身振りの起源は、大人が子どもにある身振りをするように仕向ける儀式化したゲームか、子ども自身が学んだものをどう操作するかというからだの動きの型であると、アクレドロらは結論づけている。

この時期の身振りが大人の自発的身振りと根本的に違うのは、形式の安定化という、言語に代表される社会的に共有された記号の特徴を備えていることである。大人に見られるような、ことばと身振りの機能分化はまだはっきり見られないようである。そのような兆候は、子どもが単語と単語の組み合わせを自在にあやつるようになる2歳ころまで待たなくてはならない。

## 2) 記号を組み合わせることの発見

20カ月齢前後に、単語と単語を組み合わせる二語発話をはじめて出現する。文法の獲得の最初の現れである。一語発話から二語発話へという大人のことばに向けての発達の重要な一步は、唐突な変化でなく、いくつかの段階を経て起き、身振りがその過程で重要な役割を果たしていると考えられる。

前項で述べたように、身振りと原言語発話の組み合わせは身振りの出現の初期から見られ、2歳の誕生日を迎える前に、子どもは完全に安定した意味を同定できる単語同士を組み合わせることを覚える。そのような組み合わせが出現する前段階にまず顕著なのが、指さしの頻度の激増である。生後11カ月ごろから増えた指さしは生後15カ月ぐらいで頻度が4倍ほどに増えたあと、安定期に入り、21カ月ころに減少しはじめる (Lock, *et al.*, 1990)。すなわち、指さしは子どもが一語発話を使っていると思われる時期にだけ、高頻度で現れる。

ゴールドデン=メドウとモーフォード (Goldin-Meadow & Mor-

ford, 1990) によると、まず現れる記号の組み合わせは、身振り  
と身振りの組み合わせである。これらは頻度も低く短期間で見ら  
れなくなる。13カ月から18カ月ころ現れ、数カ月続いたあと単  
語と単語の組み合わせ、いわゆる二語発話が現れる2~5か月前  
に消えてしまう。ほとんどすべて指さしと指さしの組み合わせ  
(たとえば、パズルの一片を指しそれを置くべき板を指す)か、  
指さしと手のひらを上に向けて差し出す「ちょうだい」の身振り  
の組み合わせで、指さしと他の象徴的身振りの組み合わせや象徴  
的身振り同士の組み合わせはきわめてまれである。きわめて限ら  
れた最も慣れている記号の組み合わせによって、子どもは概念の  
組み合わせを表現することを発見するわけである。しかし、周り  
の大人は発話なしの身振りの連鎖をすることがほとんどないので、  
表現形式の社会的共有へ向かわず、他の組み合わせに対して  
不利な状況にあり、そのためやがては消えていくことになると考  
えられる。

その次に現れるのが、身振りと安定した意味の同定できる単語  
との組み合わせである。身振りは主に指さしである。このような  
組み合わせは、16カ月前後で現れたあと、比較的高い頻度で使  
われ、二語発話が現れたあとも引き続き見られる。身振りと単語  
の組み合わせには、その2つの記号の意味関係により2種類に分  
類できる。一つは犬のぬいぐるみを指して「犬」と言う「種類同  
定タイプ」。もう一つは、手のひらを上に向けて差し出す身振りに  
「クッキー」と言うことによって、「クッキーちょうだい」と  
いう動詞と目的語のような意味関係を作る「述語タイプ」であ  
る。頻度としては、種類同定タイプの方が述語タイプの2.5倍か  
ら8倍も多く使われる。

ブッチャーとゴールドデン=メドウ (Butcher & Goldin-  
Meadow, to appear) によると、まず種類同定タイプが現れる。

種類同定タイプは前節で述べた指さしと原言語発話との同期という現象の発展である。しかし、この段階では「一般的意味を持つ記号」、すなわち発せられた単語は、大人が解釈可能なより社会的に共有されたものになってきている。指さしによる具体例への注意の共有のみならず、それを内包する言語による世界の分節化も共有化されてきたわけである。指さしとことばの双方が社会性を帯びるようになると同時に、その2つが1つの統合された行為として遂行されるようになる。ブッチャーとゴールデン=メドウによると、種類同定タイプの出現を境に発話と身振りの同期が緊密になることが報告されている。

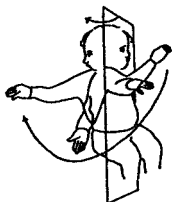
述語タイプは、種類同定タイプに0～4カ月ほど遅れるが、二語発話よりは2～4カ月早く現れる。ひとたび指さしとことばが一つの統合された行為となると、動詞と目的語の関係のような一つのまとまりとなる概念の組み合わせが表すことができるようになる。ここまでくると、二語発話まではあと一步である。どの単語とどの単語が組み合わせ可能かという知識さえ得られれば、述語タイプの組み合わせのうち身振りを単語に置き換えれば二語発話になる。ブッチャーとゴールデン=メドウは、述語タイプの出現時期と、単語と単語の組み合わせの出現時期は、相関がきわめて高いと述べている。

### 3) 二語発話以降

二語発話が出現し、単語の組み合わせがさらに複雑になるにつれ、身振りとことばの関係は最後の変化を遂げる。指さしの頻度は低下し、それとともに前節で述べたような身振りとことばの組み合わせは姿を消す。アイバーソンら (Iverson, *et al.*, 1994) によれば、語彙の広がりに従い象徴的身振りの種類の増加が止まり、それらを単独で使うことも減ってくる。



■図4 からだの後ろにも広がる物語空間（マクニール、1990）



それで、それと一緒にいつちやつたんだ、あの中に

直示的身振りの出現以来、身振りは社会的に共有された記号として、私的な世界の分節化からスタートした言語の発達の足場となってきた。言語が独り立ちできるようになったこの段階では、からだはもう一度私的な「からだ的思考」の場として使われる余地が出てくる。しかし、すでに培われたことばとのつながりは失われない。こうして、ことばと身振りの関係は、すなわち分析的思考とからだ的思考の関係は、お互いに影響を与え合いながら、私的なものである非言語的認知について他者と共有する発話を可能にするような仕組みに組み変わる。

しかしながら、単語と単語を組み合わせることを学んだだけでは、子どもの身振りはまだ大人と同じにはならない。それは子どもには子ども特有のからだ的思考があるからである。その一例を挙げると、子どもにアニメーションを見せてそれについてお話をさせると、物語の仮想空間の真っただ中に自分の身を置いてしまう（他の例についてはマクニール（1990）を参照）。そのため、表象的身振りは図4のように後ろまでいくことがある（子どもは2歳半）。また、席から立って物語空間の中を歩き出していってしまうようなこともある。

このような段階を経ながら、からだ的思考の発達も完了したとき、大人と同じような表象的身振りが見られるようになるのである。

●読書案内

- 1 McNeill, D., *Hand and mind*, University of Chicago Press, 1992

マクニールの身振りの理論の集大成ともいうべき本。コーディングなどの詳細にも触れ、身振り研究のハンドブック的役割も果たす。子どもや脳損傷患者の身振りについても言及する。

- 2 佐々木正人『からだ：認識の原点』東京大学出版会，1987

からだが認識に深く関わっていることをさまざまな研究を通して論じる。身振りのみならず、視覚、空間認知、イメージなど、従来からだとの関わりが重視されなかった、または無視されてきた分野についてもからだの関与を論及する。

## 第3章

- Acredolo, L. P. & S. Goodwyn (1990), "Sign language among hearing infants." In V. Volterra & C. J. Erting (eds.), *From gesture to language in hearing and deaf children*, pp. 68-78. Springer-Verlag.
- 麻生 武 (1992), 『身ぶりからことばへ』新曜社.
- Bates, E., Benigni, L. Bretherton, L., Camaioni, L., & V. Volterra (1979), "Cognitive and communication from nine to thirteen months: correlational findings." In E. Bates (ed.), *The emergence of symbols: cognition and communication in infancy*, pp. 69-140. Academic Press.
- Butcher, C. & S. Goldin-Meadow (to appear), "Gesture and the transition from one- to two-word speech: when hand and mouth come together." In D. McNeill (ed.), *Gesture: Window into thought and action*. San Francisco: The New Lexicon Press.
- Chomsky, N. (1965), *Aspects of the theory of Syntax*. Cambridge, Mass.: The MIT Press. / 邦訳チョムスキー, N. (1970), 『文法理論の諸相』安井稔訳, 研究社.
- Goldin-Meadow, S., Alibali, M. W. & B. Church (1993), "Transitions in Concept acquisition: using the hand to read the mind." *Psychological Review*, Vol. 100, 279-297.
- Goldin-Meadow, S. & M. Morford (1990), "Gesture in early child language." In V. Volterra & C. J. Erting (eds.), *From gesture to language in hearing and deaf children*, pp. 249-262. Springer-Verlag.
- Iverson, J., Capirci, O. & M. C. Caselli (1994), "From communication to language in two modalities." *Cognitive Development*, 9, 23-43.
- 喜多社太郎 (1993), 「ことばとジェスチャー」『言語』Vol. 22, pp. 78-81. 大修館書店.
- Kita, S. (1993), "Language and thought interface: a study of spontaneous gestures and Japanese mimetics." ph. D. dissertation, University of Chicago.
- Kita, S. (to appear), "How representational gestures help speaking." In D. McNeill (ed.), *Gesture: Window into thought and action*. San Francisco: The New Lexicon Press.
- Lock, A., Young, A., Service, V. & P. Chandler (1990), "Some observations on the origin of the pointing gesture." In V. Volterra & C. J. Erting (eds.), *From gesture to language in hearing and deaf children*, pp. 42-55. Berlin: Springer-Verlag.
- マクニール, D. (1987/1990), 『心理言語学』鹿取他訳, サイエンス社.
- McNeill, D. & S. Duncan (to appear), "Growth points in thinking-for speaking." In D. McNeill (ed.), *Gesture: Window into thought and action*. San Francisco: The New Lexicon Press.
- 正高信男 (1993), 「身振りの行動発達学」『科学』Vol. 63, 499-507.

## 第4章

- Bates, E., Marchman, V., Thal, D., Fenson, L., Dale, P., Reznick, J. S., Reilly, J. & J. Hartung (1994), "Developmental and stylistic variation in the composition of early vocabulary." *Journal of Child Language*, 21, 85-123.
- 針生悦子 (1991), 「幼児における事物名解釈方略の発達の検討: 相互排他性と文脈の利用をめぐる」『教育心理学研究』39, 11-20.
- 今井むつみ (1997), 「ことばの学習の制約の起源」『認知科学』4(1), 75-98頁.
- 小林春美 (1992), 「アフォーダンスが支える語彙獲得」『言語』Vol.21, 37-45.
- 小林春美 (1995), 「語彙の発達」大津由紀雄編『認知心理学3 言語』東京大学出版会.
- Kobayashi, H. (In press), "The role of actions in making inferences about the shape and material of solid objects among Japanese 2-year-old children." *Cognition*.
- Landau, B., Smith, L. B. & Jones, S. S. (1988), "The importance of shape in early lexical learning." *Cognitive Development*, 3, 299-321.
- Markman, E. (1989), *Categorization and naming in children: Problems of induction*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Markman, E. (1994), "Constraints on word meaning in early language acquisition." In L. Gleitman & B. Landau (eds.), *The acquisition of the lexicon*, pp. 199-227. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Markman E. & J. E. Wachtel (1988), "Children's use of mutual exclusivity to constrain the meanings of words." *Cognitive Psychology*, 20, 121-157.
- Soja, N., Carey, S. & E. Spelke (1991), "Ontological categories guide young children's inductions of word meaning: Object terms and substance terms." *Cognition*, 38, 179-211.
- 綿巻 徹 (1985), 「一語期初めの言語獲得—語彙の大きさの発達を中心に」『文部省科学研究費特定研究(1)言語の標準化 言語の獲得過程についての発達心理学研究』.

## 第5章

- Clark, E. V. (1973), "What's in a word?: On the child's acquisition of semantics in his first language." In T. E. Moore (ed.), *Cognitive development and the acquisition of language*. New York: Academic Press.
- 岩立志津夫 (1981), 「一日本語児の動詞形の発達について」『学習院大学文学部研究年報』27, 191-205.
- 岩立志津夫 (1992a), 「言語獲得」『発達心理学ハンドブック』550-563頁,

上課程修了，學術博士。

『た言語起源論』，紀伊國屋書店，1991。  
『公新書』，1993。『ヒトはなぜ子育てに

教育心理学専攻。

店，1981。『内容研究 領域 言葉』  
『学習入門』（共著），北大路書房，

## 子どもたちの言語獲得

© H. Kobayashi & M. Sasaki 1997

---

初版発行———1997年10月1日

編者———小林春美・佐々木正人

発行者———鈴木荘夫

発行所———株式会社大修館書店

〒101 東京都千代田区神田錦町3-24

電話03-3295-6231(販売部) 03-3294-2356(編集部)

振替00190-7-40504

装丁者———よなみね佐乃

編集協力———(有)メビウス

印刷所———壮光舎印刷

製本所———牧製本

---

ISBN 4-469-21212-1

Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、  
著作権法上での例外を除き禁じられています。